

【遺族】 大崎 佑輝 氏（平成 12 年（当時 10 歳）、妹を交通事故で失う）

【要旨】

○当時の状況

平成 12（2000）年 11 月 28 日の朝、飲酒運転の軽トラックが集団登校中の小学生の列に突っ込み、妹の涼香（当時小学 1 年生・7 歳）と私の同級生の 10 歳の男児の 2 名が亡くなりました。私の兄（当時 11 歳）と私（当時 10 歳）、妹の涼香の兄弟 3 人を含む小学生集団登校中の事故となります。

その日の朝、自宅前に集合し、いつもどおり家の前の長い坂を登り、片側一車線の国道に出ました。国道沿い左側の歩道を歩きながら、目の前にこの事故で亡くなった同級生の後ろ姿、そして事故現場手前 30 メートル付近の左側の壁沿いにある防火用水か何かを目にした後、目の前が真っ白になり、気付いた時には目の前に青い車体全部が現れ、私の顔に衝突しました。車両と壁の間に挟まれた格好となりましたが、隙間があった右側よりすぐに抜け出すことができ、一直線に 10 メートルほど先に仰向けで倒れていた涼香のもとに駆け寄りしました。

赤い血が、涼香と地面の間から大量に流れ出ており、必死に涼香の名前を呼び続けました。少し開いていた口の中が少し動き、喉がコクッと動いたきり、何の反応もありませんでした。兄が運転者に向かって、大声で「何してるんだよ！」と泣き叫んでおり、大人が次々と来て、車両に挟まれた他の人たちを救助していました。その最中も、私はずっと涼香に対して名前を呼び続けていましたが、大人たちに抱えられて、道路を挟んだ写真屋に避難しました。

泣き叫ぶ母親と救急車に乗り病院に到着後、ベッドで治療を受けながらも、当時のテレビ番組「奇跡体験アンビリバボー」で的一幕のように、奇跡的にみんな助かって通常の日が戻るのだろうと冷静に考えていました。しかし、母親の号泣する声で涼香が死んだと聞こえ、理解したような、できなかつたような、夢のような、そんな感覚を持ちました。

その後のお葬式や自宅での家族や親戚の悲しい表情、当時の雰囲気、全てではありませんが、そのほとんどが色褪せることなく鮮明に記憶に残っています。

今まで私自身の口から事故の経験や心の中を発する機会はほとんどありませんでしたが、本シンポジウムに参加させていただき、何かお役に立てることがあるのであれば幸いです。

○学校や周りの環境で困ったこと、嫌だと感じたこと

学校では当然のように事故のことが知れ渡り、当時は周囲もこどもだったこともあり、事故のことを直接聞かれることが度々あり、とても嫌だった記憶があります。また、日常会話や学校生活の中で、きょうだい、家族、車、交通安全といった事故に関する話題になったときに、事故の話をされないか、みんなが自分に対して事故を重ねていないか、「かわいそう」と思われていないかなどと考え、その場から逃げたい、いなくなりたいと感じることも多々ありました。できれば、事故のことはみんな忘れていて、知らない状況の中で生活したいと

感じていました。

○心の支え、支援について

そのような中、事故の1年後に転校してきた友人と非常に仲良くなり、事故のことは知っていながらも直接聞かれることはなく、私自身も気にせず楽しく過ごす時間が増えたことから、涼香が亡くなり心にぽっかり空いた穴を埋めてくれるような存在に感じ、非常に救われました。当然のことながら、家族や親戚とは、事故の悲しみを共有しているという点において楽に過ごすことができ、支えとなっていたと感じています。

直接的な支援としては、小学生時、カウンセリング等にも行かせていただきましたが、できれば行きたくない、自分には不要とさえ感じていました。それは、当時は、カウンセリングというのは精神的に問題がある人が行くところと感じていたのに対して、自分自身の精神状態は全く問題ないと思っていたからです。

小学校、中学校、高校と進学をする中で、周りの人々の記憶からも当時の事故や私自身の境遇に対する記憶も薄れていったこともあり、知られたくないという気持ちは持ち続けていたものの、日々の生活の中で事故の経験に対して嫌な思いをすることはほとんどなかったと思います。しかし、どこかで、自分は事故に遭って妹を失った事実に対して、言葉は違いかもしれませんが「劣等感」のようなものに常に苛まれ続けていたと感じています。

また、周りには、同情されたくない、事故の事実を忘れてほしいなどと願いながらも、自分が負った悲しみを理由にして何かと向き合うことを避け、自分の弱さやできなかったことを事故のせいにしてしまうこともありました。あの日の事故や涼香が悪い、そんなことなどたったひとつもないはずなのに、マイナスな事象に結びつけてしまう自分に苛立つことも多くありました。自分だけがつらい経験をしたわけでも、この世の中で一番つらいわけでもないと分かっているながらも、なかなか出口の見えない気持ちを吐き出せる場所もなく、悩み続けていました。

そのような中、当時の私の胸に刺さった、結果的に自分の支援となったのではないかと感じる出来事があります。それは、私が高校1年生の時、担任の先生から進路相談時にかけての言葉です。当時、非常に仲が良くなった転校生、涼香を失った穴を大きく埋めてくれた親友を、高校1年生の時に海難事故で亡くし、再び心に大きな穴が開いたような自分に対して、担任の先生から次のようなニュアンスの言葉をかけられました。「あなたは普通の人からこれから経験するかもしれない、とてつもない大きな悲しみを二度、すでに人生で経験し、それでも今、立派に生きようとしています。だから、これからの人生、何があっても大丈夫です。心配しないで生きなさい。」

事故発生時より、私は、悲しい経験をしたことが自分にとってマイナスな事象であると感じていましたが、当時親族でもない大人が、大きく年の離れたこどもに対し、誰よりもつらい経験をしたこと、様々な気持ちがあることを認めてくれ、自身の気持ちを理解してくれて

いると感じたことで、非常に嬉しく、心強く、前向きな気持ちに切り替わるきっかけになったと感じています。

人それぞれにおける気持ちの持ち方は千差万別だと思います。何もしないこと、何かすることの時点でも、当事者にとっての正解、不正解があり、支援については非常に難しい問題だと感じています。時間の経過とともに正解、不正解も変わってくると思いますし、支援とは非常に複雑な問題だと思いますが、私自身にとっては、心を理解された上で投げかけられた言葉が自分の心のベクトルが少し変わるきっかけとなり、結果として他者からの支援となったのではないかと感じています。

○必要と思われる支援

正直に申し上げますと、今現在でも悲しみだけに明け暮れているわけではありません。この事故で経験した事象、それにより大きく変わったであろう今現在の私の人生、環境を受け止めているつもりですし、今の私を取り巻く人たちにも心より感謝をしています。

涼香と楽しく過ごした日々の思い出は確かに少しずつ薄れていくのに対し、25年を経た今でも、あの日の事故、その時に見た景色は深く、深く心に刻まれていることも事実です。

今でも、きょうだい構成を誰かに問われた際、即座に「4人きょうだいだ」と即答することができません。涼香の存在を、あの日の事故があった事実を、隠してしまうことがあります。それによって、自分自身が悔しい思いをしたり、涼香に対する引け目から申し訳なく感じてしまうこともあります。不意に涼香のことを思い出し、あの日の事故が変えてしまった未来を思い耽ってしまうことがよくあります。事故直前から亡くなった記憶、その時間私は何を見ていたのか、実際助けることはできなかったのか、そんな後悔の念も完全に忘れることはできないと思います。それでも今までの期間、当時のことを忘れず思い出してくれる人たちや、理解してくれた人の行動や言葉が、前を向いて歩いていく力となる部分も非常に多くありました。当時とは考え方も変わり、今ではプラスに捉えられる事象も多く、年月を重ねるごとに強く生きる、生きようとするのができているのではないかと感じています。

悲しい経験をしたこどもに、私の経験や言葉や何かが、今後の命や生き方に少しでも寄与できるとすればとても嬉しく思いますし、何か自分にできることがあればやりたいとも思っています。年月を重ねることだけが、当人の悲しみを少しずつでも和らげる唯一の方法であるとするのであれば、少しでも長く健やかに年月を重ねられるような方法や環境の提供が、必要な支援なのではないかと感じています。